



12月下旬からイギリス映画「レ・ミゼラブル」が全国で上映されます。この夏、私は『レ・ミゼラブル』と『三銃士』の舞台の取材のためにパリを訪れました。以下はその時に綴ったエッセイ（夢物語）です。映画を観る前にお楽しみください。

「ああ、抱けなかったマドモアゼル！」

パリに到着した最初の日、少し時間があつたのでオペラ座で公演中の舞台を観賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

急な思い付きだったので予約席券はありません。入り口で自由席券を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。思いがけずも隣りの席には若くて美しいフランス女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

「お隣に座ってもよろしいですか？」

彼女も私の英語がわかったらしく「ええ、どうぞ」とニコリとうなずきました。（フランスでは意外に英語のできる人が少ない。英語ができてても自国語＜フランス語＞への誇りから話そうとしない人もいる）

親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとする二つのフランス人作家の作品の舞台や場所について相談しようと思ひ話しかけました。と、彼女は言ったのです。



「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。あなたの訪れようとする作品については私も読んである程度は知っていますから参考になるお話をできるかもしれません。よかったら自宅にいらっしゃいませんか。家はここからそんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな！”

私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近くでした。「よかったらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれたのです。そして言いました。



「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言うと彼女はバスルームに入っていきました。部屋にひとり残った私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。10分ほどして彼女がバスルームから出てきました。

と、なんとという驚き！！



彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通って見えてきます。私はショックでどこに目をやってもよいかかわらず、いすに座ったまま動きがとれずにいました。

と、彼女はぐんぐん私に向かって歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いっきり彼女を抱きしめようと両手を広げました。ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした目をこすりながら、ホテルのベッドの上で枕を抱いていたのです。

